

椰子の実とワタカ

—鳥浜貝塚傍観記—

永江 秀雄

椰子の実

昭和五十八年八月のある日のこと、既に全国にもその名を広く知られている鳥浜貝塚から、椰子（ヤシ）の実が発掘された。少なくとも二個分と考えられる椰子の実（厳密に言えば、恐らくその中の種子）の破片が出土したのであった。二十数年の長きにわたって、

この鳥浜貝塚に真剣に取り組んで来られた森川昌和氏(現在、若狭歴史民俗資料館副館長)から、私は出土後まもないこの椰子の実を見せて頂くことができた。

素人目にも一見してそれとわかる椰子の実は、透明のケースの中に水浸しになって保存されていた。森川副館長について資料整理室に入った私は、指し示されるケースの中をのぞき込んだが、まるで生まれだての赤ん坊を見るように、それも自分の子供を見るほどに、胸のとさめくのを覚えた。「ああ、やっぱり、椰子の実だ」と、喜びがこみあげて来るのであった。鳥浜貝塚からは、丸木舟や赤漆塗りの櫓を始め実に貴重な遺物の出土が相ついでおり、全く専門外の私も若狭歴史民俗資料館

にあつて、鳥浜貝塚の遺物については毎日のように見聞している。しかし、この椰子の実の出土こそ、私にとつては最大の喜びであり、感動であつた。

民俗学に親しまれた方なら、もはやおわかりであろうが、「椰子の実が出た」と聞いた途端、私は柳田国男先生の有名な著書『海上の道』を思い浮かべた。これは柳田先生の偉

大な御研究と著述の中でも最も重要なものの一つであるが、先生が若き日の学生時代に愛知県の伊良湖岬において、遠く南方の島より太平洋の潮に乗って流れ着いた椰子の実を発見され、日本民族あるいは民俗や、文化の淵源成立について、壮大な構想理論を打ち立てられる契機ともなったことを述べておられる記念すべき論著である。

この伊良湖岬の椰子の実の発見が、柳田先生から友人の島崎藤村に伝えられ、あの有名な「椰子の実」の歌——名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ、云々——が作詩されたのであつた。このことをも紹介された後で、『海上の道』に柳田先生は「小野氏の本草啓蒙に依ると、佐渡の他にも但馬・若狭、奥州にも四国にも椰子の実の漂流して来た前例がすでに有つた」と述べ、また「日本の海端に、ココ椰子の実が流れ着くといふことは決して千年ばかりの新らしい歴史では無かつた筈である」とも明記されている。

ここにいわれる「小野氏の本草啓蒙」とは、江戸後期の本草学者小野蘭山の講述を出版した『本草綱目啓蒙』のことである。弘化四年

(一八四七年)に完成した『重訂本草綱目啓蒙』(「復刻日本科学古典全書」第十五巻、朝日新聞社発行)をひもとくと、椰子について、「和産なし、熱国の産なり。実は四辺の海辺に漂流しきたる故に四国但州佐州奥州若州等の地に間あり。」云々、とある。一昨年夏、大阪市立大学の教授で、地質の中の古生物や植物学研究の権威である粉川昭平先生もわざわざ来訪されて、この椰子の実を確認された。先生は私に対しても「椰子には種類が多いので、即座にどれとは言えないが、椰子科のものであることに間違いはない」と教えて下さつた。私からは先生に、『海上の道』のことなどお伝え申し上げた。

思えば、柳田国男先生の明言された通り、若狭湾などへの椰子の実の漂着は、決して千年ばかりの新らしい歴史ではなかつたのであつた。鳥浜貝塚の発掘調査に尽力している若狭歴史民俗資料館の優れた学芸員網谷克彦氏によると、椰子の実の出土した層は「五千年乃至五千五百年、少なくとも五千年は降らない」とのことである。私は、鳥浜貝塚に椰子の実出土のこの事実を、柳田先生が御健在

であれば、どれほどか喜んで下さったであろうにと残念でならない。

なお、私が『海上の道』と椰子の実に殊のほか興味と関心を抱いたのは、必ずしも短かい年限のことではなかった。実は昭和三十六年十一月十九日、小浜市の明通寺で開かれた若越総合短歌大会に出席したとき、小浜市在住の歌人竹中皆二氏の作歌の中に「あいのかぜ」という方言が用いられており、ある方から方言研究者永江にと名指してこの語の解明を求められたことに始まる。即ち、この方言アイノカゼとは、万葉集の伴家持の歌にも幾度か用いられている「あゆのかぜ」のことであるが、そのとき即答できなかった私は、その後できる限りこの語を追い求めることとなったものである。その経過と結果は、昭和三十六年十二月二十五日の福井新聞夕刊、三十七年七月一日と二日の同紙夕刊、四十六年八月一日の北日本新聞、五十二年七月発行「フオクロア・1」等に発表したもので、ここには省略する。

柳田先生は、このアイノカゼ、古くは「あゆの風」のことを、名著『海上の道』に詳述

永江 椰子の実とワタカ

されておられ、椰子の実のように「海からくさくさの好ましいものを、日本人に寄与した風」(海に向うから吹き寄せて来る風)であると説いて、この風を極めて重要視されている。アイノカゼに引かれて『海上の道』に読み入った私は、そこで椰子の実とその歌のことを初めて学んだ。そして、民俗研究の立場から、鳥浜貝塚の椰子の実の出土に最大の感動と歓喜とを得る結果ともなったものである。正に、アイノカゼが私にも「椰子の実」をもたらしてくれたものであった。

黒潮の運びし幸か幾千里

若狭の浜に着きし椰子の実

いにしへゆ吹き続きけむあゆの風

椰子の実寄する若狭の浜に

若狭なる鳥浜にいま五千年

古りにし椰子の実掘り出だされぬ

(五八・八・二八拙詠)

ワタカ

鳥浜貝塚の発掘調査は考古学の専門家によって行われ、これまでの日本史を書き換えることまでいわれる数々の素晴らしい成果が挙げ

られて来た。そして、その出土品などについての研究解明には、常に考古学以外の学者や研究者の大きな協力も寄せられている。考古学や歴史学以外にも、動物学・植物学・作物学・地質学等々、いわゆる学際的協力の美しい姿と成果を、いつも目の当たりに眺めて深く感嘆している私である。この私に対し、昨年十一月月上旬、若狭考古学研究会長の上野晃氏から実に興味ある話が伝えられた。もちろん、興味は結果的に生じたことではあるが。

鳥浜貝塚の発掘調査は、現在福井県教育委員会の仕事として、若狭歴史民俗資料館の森川副館長以下がその作業と整理と研究を担当されているが、幾人もの学生達が研究や論文作成のために、ここに来て発掘に参加しているのを、よく見かける。その一人として筑波大学大学院生の本郷一美嬢がある。この学生は鳥浜から出土する魚の骨の研究をしているとこのことで、三方湖に生きている魚を買って来て、煮てはその骨を取り出して色々と比較し調べたりもしています、と語っていた。

三方町鳥浜の住人であり長年ここの貝塚発

掘に協力貢献されている上野晃氏は、この本郷のために鳥浜の漁業に関する古文書を借りて資料館へ持ち込まれたのであった。これは曾て武生高等学校などの先生をされながら、県内のイトヨなどの魚の研究を続けて学位まで取られた今は亡き五十嵐清氏の調査資料であったという。五十嵐博士は、三方湖に棲む淡水魚の鱒（ハス）の研究をされるため、直接湖中の魚類を調べると共に鳥浜に伝わる漁業関係の古文書をも調査されたようである。上野氏から見せられたその資料は、「万治年間 はずの古文書 貴重」と表書きした紙袋に入れられているので、ここでの調査の対象は主に「鱒」に集中されていたように思われる。

これを持参された上野氏は、私にこの解説を求められ、大学院生本郷さんの研究に参考になるように望まれると共に、更に「これは、若くして不幸にも交通事故で亡くなられた故五十嵐清先生が、聞き取り調査のうちに資料として収集されたもので、先生の執念がこもっているものです。どうか故人を生かす意味において研究願います」と申し添えられた。

所で、拝見した古文書は、ただ一点を除いて他の全部が古文書を撮影した写真のコピーであり、それも率直に断片的で不鮮明なものが多かった。文書の順序も不明であり、ほとんどが前後を欠いているようであった。

しかし、ただ一枚だけ和紙に毛筆書きされた実物が収められており、これが最も貴重となった。敢えて「実物」といったのは、これが最初に書かれた本当の意味の原本かどうか、今の私には不詳だからである。幸いなことに、この文書は微力の私にもその大意が読み取れた。その中に、魚の名前と村名が列記されているが、「鱒」と「はず」の間に、「わたか」としか読めない魚名があった。この日、わが資料館の法本義弘館長も出勤されていたので、私はこれらの古文書解説の御協力をお願いした。やはり、この箇所は「わたか」としか読めないアという結論になった。

に参加されていた筑波大学の西田正規氏（文学人類学者、理学博士）がたまたま来室されており、私に対して即座に「ワタカという魚は、いますよ」と答えて下さった。

初めて聞く魚名なので私は驚くと共に、私の分野の古文書解説が間違っていないか、この分野の古文書解説が間違っていないか、これを知らずに大変うれしかった。それで、すぐに書架の『日本動物図鑑』を調べたが、ワタカがない。余り知られていない魚らしいと思いつき、念のために『国語大辞典』を見たところ、ちゃんと出ているではないか。続いて『動物の大世界百科』第十六巻（日本メー ルオーター社刊）にも、『琵琶湖の動物』の解説の中に「魚食性で口が深く切れこんだ奇妙な顔のハス、おもに水草を常食としているワタカ」と述べられていることを見出した。ここまで来たとき、私には大変な興味を湧き起こった。全国から注目を浴びている鳥浜貝塚は、三方湖に注ぐ鱒川（はずがわ）の河川改修によって発見され、この遺跡は鱒川とその支流の高瀬川流域に所在していることは、既に周知のところである。私も、特に「鱒」というこの珍しい漢字に魅せられて、この魚

名に大きな関心を持ち、鳥浜貝塚を初めて訪れたとき、一番に「ハスという魚は今もいままるか」と尋ねた程であった。このハスなる魚は、淡水魚で琵琶湖にも棲み若狭の三方湖にもいるが、このことは太古の時代に琵琶湖と三方湖は一続きであったという説を補強する事実ともされているらしいことを、私は以前に聞いた記憶があった。ワタカも正に同然なりと思に至った私は、かくて初めてお目にかかった古文書の「わたか」を尋ね、「だれかワタカを知らないか」と探し始めることとなつてしまつた。

幸いは幸いと呼び、私は福井県水産試験場にわが家のすぐ隣から勤務されている小林吉三氏（技術開発課長）のあることを思い出し、極めて懇意の同氏にワタカのことを尋ねた。氏は以前には長年にわたり滋賀県水産試験場に勤務されていたので、淡水魚に最も詳しく、琵琶湖には今もワタカのことを直ぐに教えてくれた。また、福井県、続いて滋賀県の水産試験場からは、『原色日本淡水魚類図鑑』ほか多数の専門書によって、ワタカに関する解説のコピーを送って下され、遂に、コイ科

ウグイ亜科ワタカ属の淡水魚であるワタカの全容を詳細に知ることができた。一方、私は三方湖にワタカが今もいないか、曾ていたということを実際に知る人はいないかを探った。特に鳥浜漁業協同組合の方から多くの御教示を頂き、その御紹介にて、ある古老が「今はいないが、以前にはワタカという魚がいたということを知っている」と答えて下さったことを知った。鳥浜在住の人々にもほとんど知られていない魚名ではあるが、和名ワタカ、琵琶湖沿岸での方言名ワタコ・セムシ、また奈良ではウマウオと呼ばれるというこの魚が、三方湖や鱒川、あるいはその周辺にいたりとか、いたということ、だれか知つておられないか、私はもつと広く呼びかけたいと思つている。

最近、昭和四十一年に発行された五十嵐清氏と加藤文男氏共著の「福井県の淡水魚類」その他の論文を、上野晃氏から見せて頂いた。三方五湖の魚類についても綿密な調査報告がなされているが、ワタカのことを見当たらない。ただ、昭和五十八年十一月発行の「福井市立郷土自然科学博物館研究報告」第三十

号所収の加藤文男氏（県立高志高等学校教諭）の論文「福井県の淡水魚類」（8・コイ科魚類）の中にワタカの記述があるのを、上野氏から見せて頂いた。即ち、福井県では日野川（武生市で昭和五十三年九月二日と福井市）で計二尾が獲れたが、これは「琵琶湖稚鮎」とともに移入されたものと思う」と報告されている。

最後になつたが、上野晃氏のもたらされた五十嵐清博士収集の古文書のうち、前述どおり実物の伝えられた唯一の内容を次に掲げよう。しかも、これは私にはどうしても読み得ない数箇所があつたので、私が長年にわたり古文書について御指導を賜つている国立史料館の浅井潤子先生によつて完全に解説して頂いたものである。

一	三百八拾数	鮒	氣山
一	貳百数	鮒	いらずみ
一	貳百九拾数	鮒	鳥浜
一	貳百は	わたか	同村
一	七百貳拾は	はず	同村徳助

永江 椰子の実とワタカ

是は 殿様 御見物被成候ニ付
 鳥浜之者共ニ大綱御ひかせ
 被成候刻 殿様より
 右之者 御拝領ニ被下候処
 実正也 為其如件

万治貳年

月崎助十郎

亥ノ四月五日

右の月崎助十郎とは、別のコピー資料によつて、舟奉行（浅井先生によれば、領内辞令の奉行）をも勤めた役人であると判断されるが、この文書にはその宛名がない。ただ、最初の二行を欠くけれども殆んど全く同内容の文書コピーが別があり、それには文書の最後に「鳥浜庄屋三郎太夫」と宛書きされているので、右の文書も当然に鳥浜村の、そして恐らく昔の庄屋三郎太夫というお家に伝わったものと考えられるが、私には今そのお家と文書の関係については確認できていない。

しかし、これらの文書によつて、万治二年（一六五九年）にはこの鳥浜の面する三方湖に、琵琶湖同様に淡水魚のワタカが、たくさん生息し漁獲もされていたことは、全く明白

となった。それも、もちろん琵琶湖の稚鮎に紛れて運び込まれたものではなく、必ずやハスと同様に琵琶と三方の両湖が一連であったといわれる、太古の時代からのものに違いないであらう。

私はここに、右の鳥浜文書の内容と意義を、まず以て五十嵐博士に御報告申し上げ、その御功績に深い感謝を捧げたいと思う。そして、私にもワタカを知るきっかけを与えられた大学院生の本郷一美氏が、鳥浜貝塚出土の魚骨の丹念な調査を続けられて、ワタカの存在を確認されることをも期待したい。また、以上のささやかな経験から、私は将来とも郷土の研究について、各分野の学際的な、更にはより広い多くの人々の協力と交流が一層密になることを、切に祈らずにはおられない。

（五九、一一、一八記）